

文学部 人間関係学科 小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は9時30分から11時30分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に7ページあり、解答用紙は2枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読み、問いに答えなさい。

心理学の歴史のなかで、人の感情に目を向けるようになったのは比較的最近のことです。ようやく、かつて非合理性の象徴とされた感情に、さまざまな機能性や法則性が潜んでいることが明らかにされつつあります。それに伴い、従来はもっぱら対立的構図で捉えられてきた「感情」と「理性」の関係性についても、抜本的に見直す必要性が声高に叫ばれるようになりました。その「感情」と「理性」の両方にまたがり、また両者を不可分につながり合わせるものとして注目されているのが、いわゆる感情知性 (emotional intelligence : 以下EI) という概念です。その研究や応用は現在、ある意味「狂騒的状況」ともいえるほどに、多様な形で展開されています。

EIには大きく2通りの意味があります。一つの意味は「感情に対する知性」というものです。具体的には自分や他者の感情に対していかに認知能力を働かせ、それらを正確に知覚・理解できるか、そして迅速かつ的確に制御・調整できるかという意味です。もう一つの意味は「感情に潜む知性」というものです。具体的には、さまざまな感情のなかに、元来備わっている合理性や機能性、そしてそれらをいかにうまく活用できるかという意味です。

ヒトという生き物は高度に社会的であり、人間関係や集団のなかでの適応が、結果的に生物的適応に通じる確率が際立って高い種といえます。進化論者が一様に強調するのは、ヒトにおいては、たとえば、狩猟採集にしても捕食者への対抗にしても子育てにしても、集団生活が単独生活よりもはるかに多くの利点を有していたということであり、また、それを維持するために必然的に集団成員間における関係性や利害バランスの調整のメカニズムが必要になったということです。そして、そこに最も密接に絡むものとして互惠性の原理、すなわち相互に何かをもらったり、そのお返しをしたり、また助けられたり助けたりするという形で、集団内における協力体制を確立・維持するために必要となる一群のルールがあると考えられます。しかし、この互惠性原理の危うさは、自己犠牲的な行為を個人に強いることにあります。個人は、自らの生存や成長のために自己利益を追求しなくてはならない一方で、それに歯止めをかけ、

他者に利益を分与しなくてはなりません。そのバランスをどこで取るかが究極の難題なのです。さらに互惠性原理が長期的に個人の適応に適うものであるためには、それを脅かし壊す、他者および自己の裏切り行為を注意深くモニターし、検知する必要が生じてくるでしょう。コスミデスとトゥービーによれば、これらの複雑な処理を可能にするものとして、罪、感謝、抑うつ、悲嘆、嫉妬、義憤、公正感などの感情が進化してきた可能性があるのではないかといいます。

アダム・スミスは、今では経済学の祖と称されることが多いわけですが、彼は『国富論』に先立って『道徳感情論』を著したことでも知られています。そこで彼は、さまざまな感情が社会という複雑な織物を編み合わせる糸のようなものであるということを書いていきます。そして、彼の有名な言葉に「神の見えざる手」というのがありますが、それは一般的に理解されているように、私たち個々がただひたすらに私利を追求すれば需要と供給のバランス調整が自然と働き、社会全体の利益が達成されるということのみを意味するのでは必ずしもないかもしれません。むしろ、それが真に意味するところは、私たちがいくら自己本位的に己の利益を追求しようとしても、私たちの内なる種々の感情によってそれらは少なからず阻まれることになり、そして、そうした感情が他者との関係性の調整をも推し進める結果、集団全体の利害バランスが相対的に適切に保たれ得るということではないでしょうか。その意味では、私たちのさまざまな感情のなかに豊かに社会的知恵が備わっており、実はそれこそが「神の見えざる手」と言い得るものであるような気もするのです。

実のところ、現今の「感情に対する知性」中心のE I研究は、上で見たような感情のさまざまな合理的な働きを明らかにしてきた、現代の感情研究者の多くが強く批判するところでもあります。たとえば、20世紀後半の感情研究をリードしてきたイザードは、私たち人間の社会的な文脈における適応性の大半は、感情に対する知性の特殊形態ではなく、感情そのものの機能性に由来するとし、E Iは、その高度に機能的である感情の活用という観点から再概念化されるべきであると強く主張しています。そして、本来、それには、(感情に対する知性というニュアンスをもともと多分に含み込んだ)“Emotional Intelligence”という術語よりも、“Emotion Adaptiveness”(感情を通じた適応性)という術語の方がふさわしいとしているのです。

また、同じく現代の代表的な感情研究者の一人であるシェラーもまた、現今のE I研究が、感情についての知識の重要性のみを強調し、感情をあくまでも認知の一対象と見なしているに過ぎないこと、またE Iが感情そのものの機能性や合理性に関わるものとして十分には概念化されていないことを問題視しています。その上で、彼は、本来、E Iなるものは、そもそも進化の産物である感情のメカニズムを活用するためのコンピテンス（有能性）として把捉されなければならない、術語もE Iではなくむしろ（能力とスキルの両方が関与する）“Emotional Competence”（EC）（感情的コンピテンス）が用いられるにふさわしいと記しています。

こうした「感情の有効活用」としてのE Iという見方は、いってみれば、感情的でないことのなかにではなく、むしろ、豊かに感情的であることのなかに適応性や幸福感の鍵を極力見出そうとするものであると考えることができます。かつて、キリスト教神学は、理性によって感情を徹底的に抑えることができること、そしてあらゆる悪しき感情から解放されてあることが人にとって最も好ましい状態であると仮定していました。しかし、そんななか、16世紀初頭、『痴愚神礼賛』で知られるエラスムスは、自らはまさに理性人たる聖職者として生きながら、痴愚の女神モリアに、人にとっての真の幸福や徳が、実は聖職者が掲げるような教条主義的な理性やそれに厳正に従ったふるまいのなかにではなく、むしろ、種々の感情に駆られた、一見、愚行とおぼしきもののなかにこそ潜んでいるのだということを諄々^{しんしん}と語らせることとなります。理性人としてではなく感情人として生きることのなかに、②人間本来の幸せの形を見て取るのです。

もっとも、エラスムスがいったかったのは、もちろん、ただ無軌道に感情的であればいいということではありません。私たちが豊かに感情的であり、その機能性や合理性の恩恵に与るためには、当然、そこに適宜、一定の加減や調整が加えられる必要があります。そして、感情というものの真の厄介さは、それが機能的なものであるためには、制御されなくてはならないが、決して制御され過ぎてはならないというところにあるのかもしれませんが。すなわち、感情はまさに「ほどよい」ところで最も私たちの適応性に寄与する可能性が高く、E Iもまた、その視座から理解される必要があるということなのです。

古代ギリシアのプラトンは、感情は制御されればされるほど望ましいという、いわ

ば “The more, the better” の見方を提示していたのに対して、アリストテレスは、ネガティブな感情も含め、感情の経験にしても表出にしてもほどよく適度なることが究極的な善や幸福に通じ得ること、すなわち “Not too little, not too much, just right” の見方を示していたといえます。アリストテレスは、人が自身の生活のなかで、現実的な幸福を手にするためには、知識・思慮・技術といった知性的な徳だけでは足りず、場合によってはそれ以上に、多分に人の内なる感情に由来する倫理的な徳が必要であるとし、さらには、それが中庸（メソテース[mesotes]）なることが大切であることを説いていたのです。たとえば、彼は『ニコマコス倫理学』のなかで、怒りそのものが悪ではなく、悪しきは、タイミングと対象と方法を間違えた怒りであるということ述べています。逆にいえば、それらの要件に適ったほどほどの怒りは、私たちにとって必要不可欠であるということです。要は、使い方だということです。

そして、先にもふれたシェラーは、このアリストテレス的な見方にならい、感情が徹底的に制御され、完全に抑止されるような事態は、個人内の心身の安定や健康という観点からしても、個人間の関係性の構築や維持あるいは時に分断という観点からしても、決して適応的とはいえないと主張しています。また、現に、シェラー自身、実際のデータに基づきながら、日々の怒りやいらだちの経験の多さと、主観的幸福感や生活への満足度との間に逆U字型の関連性があることを見出し、怒りやいらだちが中程度に経験され表出されることの適応性を実証的に示しているのです。

上で述べた「感情のほどよい有効活用」としてのEIに関して、一つ但し書きが必要だと思うことは、概して、それがすぐには効果として見えにくいということです。感情がずっと厄介者とされてきたのは、この長期的な意味での効果が見えにくいこと、それどころか、短期的には多くの場合、むしろ「失敗してしまった」という感覚を強く残すからなのかもしれません。感情が厄介で非合理と判断されるのは、実のところ、感情そのものの発動のきっかけになった出来事との関連においてでは必ずしもなく、むしろ、その感情の生起によって分断され、遂行が脅かされることになる他の活動との関連においてであることが圧倒的に多いと考えられます。たとえば、長年大切にしてきた友人関係が破綻してしまうのではないかという強い恐れや不安は、その友人関係の回復や維持に向けた動機づけや現にそれに向けた行動を引き起こすという意味で

は合理的であるはずなのに、それによって、仕事や勉学などに悪影響が及び、その効率性が失われるとなれば、一転して、厄介で非合理的なものに見なされてしまうのです。ここで、私たちが注意して確認すべきことは、現在主流のE I研究において、暗黙裡に、最も多く問題にされてきたのは、一般的に是とされる目標や課題や規範の遂行に向けての感情の制御だということです。そして、だからこそ、そこでは、仕事や勉学などの効率性を邪魔する感情は抑え込めれば抑え込めるほど望ましいということになるわけです。

しかし、その明確に一つに定められた目標や課題の達成という視座からではなく、勉学や仕事といったことに限定されない、その個人の全生活、それも今ここということではない、時間軸の広がりをもった、より長期的な人生という視座から見たときに、その友人関係にまつわる恐れや不安などを完全に自身の心理状態から排除し得ることが、果たして本当に適応的ということになるのでしょうか。こうした問いに関連して、クールという研究者は、感情の制御を、ここまで述べてきたような目標志向的 (goal-oriented) 制御の他、欲求志向的 (need-oriented) 制御、そして全人志向的 (person-oriented) 制御に分けて考えることの重要性を説いています。欲求志向的感情制御については措くとして、ここで注目していただきたいのは全人志向的感情制御のことで、それは、個人の全生活を通じての適応性や幸福感などの向上や維持に関わるものであり、先に掲げた問いに直接的に絡むE Iの形といえるかと思えます。

そこで、重視されていることは、私たち人が、基本的に、さまざまな生活領域において、実に多様な利害関心や潜在的目標を同時に抱え込んでいる存在であるということ、また、それらの利害関心や目標はしばしば、相互に葛藤や競合を起こし得るという現実です。そして、私たちは、それら競合する目標間のバランスの調整を図り、その時々々の状況や文脈に応じて、それらに適切な優先順位をつけながら、長期的に自身の全体としての心身の健康や適応性などを具現しなくてはならないのです。友人を失うことに対する恐れや不安などにふけること、また、それらの感情に沿ってそれまでの関係性の取り方やそこにおける自身の非などに対して自然に反省的な思考が働くこと、そして、耐えきれずに、その解消に向けて現実的な行為を起こしてしまうことなどは、確かに、勉学や仕事の遂行を乱し、その達成を遅らせたり、困難なものにした

りするかもしれませんが、その友人関係の修復に向けた一連の行動は、その個人の全人格あるいは全生活における主観的幸福感や長期的な社会的適応性に、より適ったものであるという可能性も否めないのではないのでしょうか。そこでは、恐れや不安を完全に抑え込むよりは、それらの感情に素直に従う方が、はるかに賢明なのかもしれないのです。

(遠藤利彦「こころの不思議——感情知性 (E I) とは何か」「感情の有効活用」としての感情知性 (E I) に向けて」『本当のかしこさとは何か——感情知性 (EI) を育む心理学』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

問1 下線部①が指す内容について説明しなさい。(30点)

問2 下線部②について筆者の考えをまとめなさい。(50点)

問3 「感情のほどよい有効活用」について、具体例を示しながらあなたの考えを800字以内で述べなさい。(120点)